

にもう一つ船いけすによる鯉の養殖業自体が無視し得ない要素になつてゐることをつけ加えたい。

現在霞ヶ浦全体でこの養殖に消費される人工飼料は年間約八〇〇〇トンになるものと推定される。くわしいことは省略するが、これをもとにして計算すると、少くとも年間約二〇〇〇トンの蛋白質が、分解物、またはそのままの形で、湖水中に投入されていることになる。この蛋白質二〇〇〇トンという数字が全体の汚濁負荷量の何多くなるかは明らかでないが、決して無視出来るものではなく、生態系破壊の有力な要素の一つになつてゐると私は見ているのである。このことは最近になつて漁業関係者にも理解され始めたようであるが、もっと早いうちに気がついていなければならなかつたことである。また県の水産行政においても「とる漁業よりつくる漁業」ということで奨励してきたようであるが、見通しを誤まつたと言ふべきであらう。

常陸川逆水門の問題

この水門の閉鎖と、養殖鯉の死との因果関係をめぐつて漁業者と県との深刻な対立が続いており、県側はこの因果関係を否定しながらも送気装置の工事費補助という条件を提示してゐるようである。しかしこれにはどうしても疑問を感じないではいられない。水門をあけた場合

湯水期には当然農業の被害が発生するが、霞ヶ浦の方は潮の干満に伴つて湖水の流動が活発になり、水の自浄作用が促進される。したがつて水門が閉鎖されていなければ、今年七月の時点で死鯉数百トンという大きな被害にはならなくて済んだであらう。が、しかし、被害がなかつたらうとは言えないし、水門を今から開けるにしても現在の規模（年間約四〇〇〇トン）以上に養殖業を拡大すれば、一、二年以内に再びこの程度の被害が発生することは避けられないであらう。また水門を閉鎖したままで、送気装置を設置したとしても、その効果は一時的なものに過ぎず、無駄な投資に終るものと考えられる。結局、水門と、霞ヶ浦の汚濁源をこのままにしておけば、他にどんな対策を講じてみても、漁業は壊滅せざるを得ないであらう。そうなつた場合、その水を人間が飲んで無害な程度に浄化することが技術的、経済的に可能かどうか、私にはわからない。

今後どうすればよいか

霞ヶ浦の死、漁業の壊滅という事態が目前に迫つてゐるいま、それではどうすればよいかということになると、これはあまりにも大きな問題で、直ちに効果をあげるような解決策を立てることは誰にも出来ないであらう。が、だからと言つてこのままにして置いてよい筈はない。